

総評 2024年2月分 杉本真維子

「少しずつ傷つけられて光り出す／こころの一番透き通る場所」マズルカ（山口県）
実際の皮膚の傷口も光りますね。心身の結びつきを改めて思います。

「犬のあくびを見ていた僕は／心なしか悪意に満ちるようだった」逆月（東京都）
心の観察が鋭く立っています。なぜそうなるのか、説明がつかないところに、「悪意」の秘密があるのかもしれない。

「その昔／獣だったにちががなく／4つのタイヤで買い物に行く」和泉次郎（新潟県）
これはたしかにそのとおりなんです。この気づきから、どういう認識のほうへ行くか。時間を遡って、古代の人々の生活を幻視する、あるいは、現在に留まって、物質のなかに命を見つけに行くなど、いろいろな可能性を秘めています。

「土器ひとつ眠る両手で抱く赤子」まちりこ（埼玉県）
「土器」の比喩が効いています。その空洞、おもさは、たしかに果てしない未来を湛えている赤子とよく重なります。胸にいだかれた赤子が聞いている主体の心臓の音（ドキドキ）も、この言葉の裏側に隠れていそうです。

「遠浅のみずうみ／布団の外に出た足から／夜に浸されていく」宮下 駿（東京都）
睡眠というものにどこかで付随している生死の水際がうまく表現されています。

「いまできた宇宙のように／髪の束／ほどけるうちに／滅びる星も」藤井 柊太（神奈川県）
言葉が詩になるときの速度が、文字面に映りこんでいるように思えます。

「蜂蜜がはるか上から垂れている／そして下へとまた垂れていく」橋口 諒介（東京都）
これは誰の、何の、どの位置からのまなざしなのでしょう。面白いですね。このひたすらな傍観が、創作者の基本的な目かもしれないのです。

「満員の電車にいと／代えのきく誰かになれた気がして／安らぐ」源楓香（東京都）
このような安堵もあったのだと気づかされました。一人では孤独になれないのと同様、一人では安らげない。「満員電車」はそのことを実感させる究極の場かもしれません。

「鳩の眼がこわいこわいと怯えつつ／その胸の虹に惹かれてしまう」桜庭 紀子（和歌山県）

平和の象徴の鳩がなんとも邪悪な目をしているのは皮肉なものです。しかし、それでも惹かれる、というところに、生のリアリティが示唆されています。

「トツーツー／トト・ツー・ト・ツー／ト・トツート／／声が聞こえる 窓の外から」現人（東京都）

この「トツーツー…」が電話の話中音ならもっと規則的なはずで、この不規則なところに人の「声」が隠れています。魅力的な一作です。

皆様の作品に、毎回、よい刺激をいただいています。次回も投稿をお待ちしています。